

賀川豊彦の畏友・村島帰之（その十一）

第130回～第141回

賀川豊彦の畏友・村島帰之（130）－村島「アメリカ巡礼」(4)

「雲の柱」昭和7年7月号(第11巻第7号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(1)

羅府を中心にして

村島帰之

九月二十日(日曜)

眼をさますと汽車の中だ。八時、ロサンゼルス着。小川牧師や、前夜自動車でサンチアゴから夜道を帰羅した高橋さんや、大坪さんたちが早や先廻りして出迎へに見えてゐる。

直ぐ合同教会へ行くと、折柄、早天祈禱會がすんで、食事が始まる處だったので、一緒に食事をす
る。

皆は、先生がエルセントロで倒れられたと聞いて心配してゐる處だったので、元気のいゝ先生の顔を見て一同大悦びだ。

先生は立って「さう心配する必要はないのに、徳さんと村島さんとで、すっかり僕を一室に監禁して
了ふので・・・」と笑ひ乍ら話される。

徳牧師も私もその後から釈明したり笑ったり。何しろ、笑って済ませる事の出来たのは感謝の極み
だ。

十一時から南加大學の講堂で、二度目の聯合日曜礼拝を持つ「七つの仮装」といふコリント後書六
章のお話である。決心者十一名。

午餐は徳牧師邸で。それから先生はメソヂスト教会に開かれた二世の青年大會に臨み、さらに
義勇伝道者の集りに出て奨めをされ、夜は白人長老教会へ出られる。

最後の白人の集會には無慮二千五百の聴衆が集って収容しきれぬため、時間前二十分位に戸は
しめられ、空しく帰る人が多かったといふ。

私は先生の留守居の意味で牧師さんたちは、全部白人の方の集會に出て居られる合同教会の日本人の集會に出て、「天國日本と地獄日本」と題して一時間ほど話した。聴衆約三百名。非常な盛況だ。

イエスの友の集り

二十一日

朝六時からイエスの友の集會を持つ。疲れられてゐる先生の眼をさまざまやうにと、地下室で讚美歌も小声でやったが、矢張り先生は七時には出席された。

私はそこでイエスの友會の現状を話し、先生はイエスの友の歩むべき道を述べられた。

この時、平田ドクトルは立って「此の度先生が武蔵野で始められる傳道事業のために一弗献金をやりたいと思ふ」と発議され、忽ちにして数十口の申込があつた。これは向ふ五年に亙り毎月各人が一ロー弗づつを献金するものである。

六年前には、恰度その頃先生が始められた大阪の四貫島セツルメントのために、一弗献金を開始し、五年間の久きに亙って毎月百弗づつを送金して来られたのが、今度は改めて武蔵野傳道のために献金せられやうといふのである。

イエスの友會に今朝の献金三十五弗をいたゞく記念寫真をとる。

先生はこの集會の終ると共に白人美以教會の白人牧師會に出席、ついで加州大學で學生のために講演された。

加州大學の學生團は先生の農民福音學校に大に共鳴し、これが校舎の建築資金として数百弗が寄附したいと申出た。

リバーサイド

午後三時、七十哩ほど距つたリバーサイドに向ふ。自動車は井下さん。一行は先生、徳夫妻、鵜浦牧師、高橋、田中、植松の諸氏と私。植松さんは活動寫真機を持参である。

赤い実を地上一面に落としている何とかいふ木や並木の下を自動車が走る。日光附近の並木の下を行く心地だ。

ガム樹は成長が早いので、かうしたドライブウエーの並木には持って来いだ、と鵜浦さんが話され

る。

基督者市・禁酒市

善いハイウェーだ。一九二六年、日曜學校大會がロサンゼルスに開かれた時、出席した日本代表二百名が五十台の自動車をつられて此の道を走ってリバーサイドに向ったのだったが、特に警官が先駆してくれたので、六〇哩をノーストップで走りつづけたといふ。

「葬式の列までが一行の通る間、立止ったほどですから大したものでしたよ」と、その時も自分のミシンを提供して世話をされた井下さんの話。

この辺一帯は蜜柑の産地だ。蜜柑畑がつづく。鵜浦、徳両牧師共に、苦学時代に蜜柑ちぎりをして学資を稼いだといふ昔話が出る。背が低くて、手先の器用な日本人は、蜜柑ちぎりには向いてるのであらう。

ルピト山上の十字架が見える。毎年イースターには羅府及びリバーサイドの信者が悉くこの山上に集まって祈禱会を開くのだといふ。

リバーサイドの町に這入る。美しい街だ。大きなシュロの樹が立ち並ぶ。この街は禁酒法実施以前から禁酒を実行してあるドライ・タウンで、人口四万しかない此の市に、四十の教会があるといふのだから、如何に精神的な町であるかが窺われやう。仏教は、ここに限って入る事が許されず、わずかに国語学校としての仕事が許されてゐるだけだ。名実共のクリスチャン市である。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(131) — 村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年7月号(第11巻第7号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(2)

羅府を中心にして

村島帰之

(承前)

ミッション・イン

リバーサイド教会の高橋牧師や柴田さんの案内で、有名なミッション・インへ行く。(インといふのはホテルとほぼ同じ意味、旅籠か)。

修道院風に建てられた高雅な建築だ。鐘のはめ込まれた蔦のからむ古風な門をくぐって、いろいろの南国植物の葉の下を行くと、そこには支那の寺院の鐘があったり、中世の、色彩のある古い聖像が置いてあったりして、二十世紀に生存してゐることを忘れさせられる。

ここは五十年前、南加州を開拓したゼスイットの宣教師を記念して建てたものだ。建設者キャプテン・ミラーは南北戦争当時の大将で、最初百五十弗の金を持って平屋の建物をたてたが漸次建てまして今日に及んでゐる。創立当初から全然禁酒ホテルで押し通して来てゐるのである。

親日家ミラー氏

現経営者フランク・エー・ミラー氏は親日家として知られ、或は親友ルーズベルトに勧告して、日本人に帰化許可の途を講ぜしめ、或は1907年の桑港における学童問題の際には率先して日本人を擁護し、或は排日土地法に対しジョルダン博士と共に防止運動に奔走し、或は加州土地法に際しては各地を巡回して反対演説を試みた等々、日本の為に尽くした事は枚挙に遑がない。最近の人形使節交換も此の発意だといはれる。日本の勲三等の帯同者だ。私たちが玄関に行きつく前、そのミラー夫妻はわざわざ一行を出迎へに門際までやって来た。

夫妻ともに背丈は高いが、しかし痩せすぎの、どっちかといへば弱い健康の持主の如く思はれた。ミラー翁は広い額の下に、柔和な眼を微笑ませて一人一人の手を握った。夫人は、つつましやかに夫ミラーと並んで一人一人に握手した。

夫妻は親友ジョルダン博士(有名な親日家)の葬儀に行かねばならぬのを、是非賀川氏に会ひたいといふので一日延ばして待つて居られたとの事であった。

私が日本の新聞記者だといふと、更に強く手を握った。毎日新聞の名も善く知っていた。パーラーにも、いろいろの骨董品が置かれてあった。食堂へ通ふ木のドアには聖フランシスのいろいろの物語が彫刻してあった。

案内所の脇には大統領タフトが腰かけたといふ大きな木のチェアが置かれてあった。私はそこへ腰を下ろして見た。

「どうです。大統領に見えませんか」

「痩せっぽちの大統領ですな」

誰かが笑ふ。

全くだ。私なら二人、裕に腰を下ろせるほどの広い椅子だ。曾てタフトが電車の中で婦人に席を譲ると、その後へ二人の婦人が腰を下ろすことが出来た――という挿話を数年前、どこかで読んだ事を思ひ出す。

私たちは中庭で食事を共にする事になった。西班牙風の建物が四方に立てつらな中央、約百坪ほどの庭園には多くの卓が置かれてある。卓上には蠟燭が点ってゐる。燭台には可愛らしい小さな鐘がつけられて、それでボーイを呼ぶことになってゐる。

ミラーさんはわざと遠慮して食卓へは出て来ない。私たちはそこで水入らずで食事をとった。「きれいな月ですよ。御覧なさい」と徳牧師がいふ。

西班牙の月なのか、アメリカの月なのか、それとも日本の月なのか、あくまで澄んだ月光を仰ぎ乍ら、私たちは落ちついて、楽しい食事の時間を過ごした。

寝室としてミラー翁が特に賀川先生にルーズベルトの寝た部屋を、私にはその隣室のタフトの泊まった部屋を提供してくれた。共にガッシリとした木製の分厚いクッションのついたベットが置かれた古めかしい部屋であった。

が、賀川先生は、

「僕は無産者だから、こんな部屋はいやだ。それよりも聖像のある部屋に泊めてほしい」

といひ出した。ミラー翁は早速と部屋を変へてくれた。今度のは二階の南向きの明るい部屋で、そこには注文通りの聖像が、壁の中にはめ込みになってゐた。

部屋の隅が穴倉のやうになってゐて、そこに手紙を書くテーブルが置いてある。

特に主人の心ざしであらう。メロンを盛った竹かごに日米の国旗が挟んであったのは。

すべてのもてなしが、親日家ミラー翁の温かい友情から出てゐるらしく、うれしい限りであった。そればかりではない。与へられた部屋には二つのベットがあったので、先生と私とが寝る事にして、隣室には徳夫妻を迎へやうとした處、支配人は曰く、

「賀川氏は是非一人で一部屋に寝て貰ふやうにして、村島氏はその隣室に矢張り一人寝て貰ふやう、ミスターミラーからの申し付けだから――」と私たちはミラー氏の細かい心づかひに、涙の出るほどうれしい思ひをした。

八時からユニテリアン教会（白人）で、まづ白人のための説教が開かれる。ミラー翁もわれ等と同行される。聴衆約二千。

教会堂は片側だけに二階があり、正面教壇の上のデザインもわざと両側を異なったものにした風変わりのものであった。

聖歌隊の合唱があって、先生は元気に説教された。話の中へ大阪毎日と私が飛び出したりした。

白人の集まりが済んでから、改めて日本人の集まりであった。コーチュラからも境さんや佐々木さんたちが大勢でやって来てゐた。先生は大分疲れてゐたので、邦人への説教は短かった。ミッションインへ帰って、果物を食べながら暫く話して後眠る。大統領の夢は見損なつたけれど。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(132) — 村島「アメリカ巡礼」(3)

「雲の柱」昭和7年7月号(第11巻第7号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(3)

羅府を中心にして

村島帰之

(承前)

二十二日

七時起床。聖オーガスチンの彫刻のある扉を押して食堂に入る。私たちのためにこしらへてあつたテーブルは、日々ミラー翁夫妻のつくテーブルだと聞いて、けふも朝から、翁の好意をひしひし感じさせられる。

食後、暫く美術品を見て廻る。

素晴らしいコレクションだ。しかも悉くが宗教に関係のあるもののみで、就中、鐘の聚集は驚く計りだ。

大化二年本多義光寄進の銘のある——かかえ半ほどある鐘——蒲団の上に据えられたもの——は、日本でも最も古いものだらうといふ。

先生はその鐘をしゅ木で敲いて見た。善い音色が、美術品の上を漂ふ。

礼拝堂もあつた。別に聖オーガスチン教会の建物がメキシコから移されて工事中のものもあつ

た。日本の寺院の一部も丁度建築中であった。

私たちはこれ等の美術品を前にして植松さんのフィルムに入った。

ミッション・インは、私たち一行の宿泊、食費一切を徴収しないのだといふ事を聞いた。

ポモナ

八時、ミッションインを辞して、ポモナに赴く。そして十時からポモナ大学で講演会。聴衆学生約五百。

懐かしき博士ラーネッド

そこで珍しくニューエル博士に会ふ。

「シヤトル以来ですな」

と挨拶され、隣席の田舎老爺のやうな紳士を紹介される。

「ドクター・ラーネッドです」

ああラーネッド！ 同志社大学に在る事数十年。日本で社会政策の講義をした最初の人——が此の人なのか、と、しみじみ手を握る。

聞けば、このポモナは、組合教会から各地へ派遣された宣教師が、宣教の戦いを終わって帰国した後、その老後を静養する場所だといふ。

さう聞くと、ここに世界の宣教師の何ページかが生きてゐるのだと思って、敬虔な気持ちになるのだった。

先生は約四十分に互って講演した。

それから晩まで時間があるので、自動車で、ひとまずロサンゼルスへ帰る。

ライオンファーム

午後四時、再びポモナへ赴く途中、ライオンファームに立ち寄る。二百匹のライオンがここで育成せられてゐるのだ。

丁度、時刻が来てライオンは檻へ追ひ入れられるところだった。大きなライオンが園丁のさし出す鉄の棒一つで、従順に通路を通って狭い檻の中へ入って行く。

四畳くらいの檻に二三匹づつ詰め込まれて眠るらしいのだが、喧嘩もしないで仲がいい。たえず

檻の中を動き通してゐるライオンが、うずくまってゐるライオンの頭の上をしじゅう跨いで通るが、跨がれる方でも手筋一本動かさない。

猛獣といふ気は少しも起こらない。

一匹のライオンが吠えだした。すると同じ檻、隣りの檻にゐるライオンがこれに和して吠えだした。本当の獅子吠だ。狭い家に響いて物凄い。私はこわごわその方へ寄って行つた。すると、吠えだしてゐたライオンが、ピタリと声を収めて了つた。

これが百獣の王のライオンだらうか。何と可愛い王さまではないか。私は頭でも愛撫してやりたい気がしてならなかつた。

次で、ベビーライオンの檻へ行く。多くの子獅子が、圓木に登ったりして戯れてゐる。まるで猫の子だ。

園丁の話では、母乳で育てた子獅子と、牛乳で育てた子獅子とは、毛の色が違ふといふ事だ。事務所の婦人は、一匹のベビーライオンを抱えて出て来た。

「生れて二十日目です。牛乳で育ててみますが、こんなに温順しいのですよ」と、背を撫ぜて見せた。子ライオンは喉を愛撫された子猫のやうに声を出して鳴いた。

同行の一人が触りかけて、怖しさうに手を引こめた。

「背中を撫ぜるだけなら大丈夫です」

といはれて、彼はこわごわ撫ぜてるヨセミテの熊といひ、このライオンといひ、敵意と飢餓がなかつたら、さう生物同志が喰ひ合ふものでもなく、却って親和するものだといふことを泌々教えられた。

人間同志だってそれに違ひない。

先生にそれからポモナへ。私ちちはまたロサンゼルスへ引き返す。そして高橋さんの御馳走になる。

後から聞いた話だがポモナでは新築のオーデトリウムに溢れるやうな聴衆だったが、先生はここで始めて貧民窟物語をされ、偉大なる感動を与へられた。

ポモナ大學の二人の學生は徳牧師に、自分も學校を出たら無産者の為め全生涯を捧げたいからミスター賀川に是非握手して貰つてくれと頼んだ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(133)－村島「アメリカ巡礼」(4)

「雲の柱」昭和7年7月号(第11巻第7号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(4)

羅府を中心にして

村島帰之

(承前)

加州大學講演

二十三日

先生は前夜ポモナの講演をすませて、ハリウッドに引返し、同夜はハンター氏方に一泊、けさは七時半から加州大學の朝食会に出席、三百名の教授、學生を前にして「平和論」を講演せられたが、その席上には主戦論のムーア總長も列席してゐたといふから皮肉だ。

その後で學生の質問を受けたが、一生徒が「日米間の友情を促進する方策如何」と質したのに對し、先生は言下に「移民法撤廢」とやって退けられたさうだ。

十時。先生は一応、合同数會へ歸られたので一緒にパサデナに向ふ。

途中、オーストリッチ・ファームに立寄る。

オーストリッチ・ファーム

蛇鳥が百七十匹ほど飼養されてゐるのだ。生後五日六日といふやうなひよこの蛇鳥が日和をかけ廻つてゐる。一匹十五弗だと訊いて、古谷さんは「買ってこか?」といふ。

蛇鳥は一夫一婦だ。四歳ぐらいになると、異性の中から恋人を選び出して、生涯連添ふで離れないといふ。そして、ふたりの間に生れた卵は、昼は父が、夜は母がその翼の中でぬくめる。そのために、男の羽は灰色で砂漠に對してカモフラージュとり、女は黒色で夜の目に外敵から発見されない様になってゐる。

ひなは二年たゝねば性別が判らない。その頃になって黒くなるもの、灰色になるものの区別がつく。各オーストリッチには、ルーズベルトだの、フーバだの、リンデーだのと、大統領や飛行家の名がついてゐる。リンデー夫妻の如きは世界一の蛇鳥で、一季節に百十九の卵を生むといふ。

私たちは園丁から蜜柑を貰って蛇鳥に喰べさせた。彼等はそれを丸呑みだ。長い喉を通時、丸口のみかんが胃部へおりて行くのがわかる。

賀川先生と私とは一匹の蛇鳥の曳る車に乗せて貰った。十数貫の人間を、やすやすとひいて行った。

彼等の卵は人間の子供の顔ほどあった。そして石のやうに堅くて重い。そのためには、石をも食べさせるといふ事だ。何といふ物凄い胃袋だらう。

バ サ デ ナ

正午、パサデナの第一浸礼教會の午餐會へ。社交室には六百の紳士淑女が集ってゐた。長老教會のフリーマン氏が司會した。彼の教會には千萬長者の信者が六十人もゐたさうだが、彼の自由思想が災ひ(?)して、半数は教會を脱退したさうだ。アメリカの教會の商業主義化だ。

午餐を終って説教。パプテスマを施す場所が正面上段に王座のやうな位地を占めてゐる。先生の説教は素晴らしい出来だった。

畢って、此度は百哩をサンタバーバラに向ふ。ハンターさんがドライブして先生を送らうといひ出したが、途中で先生に語をしかけられて困るし、ドライブ振りや車台の良悪も考慮に入れて、われ等が百パーセントに信頼する田中さんをお願いする。田中さんは信者で、そして寫真技師だ。

サンタバーバラ

海沿ひのハイウェーがあるが、少し遠道なので海路にそれをとる事にして、行きは山越えだ。美しい山の景色の大部分は、ドライブして下さる田中さんには済まぬが、眠ってゐたので見ず。先生も同様。

「二人とも眠って居られたので、起こさぬやうにと思って四十哩出したいところも三十五哩におきました」

と、田中さんがいはれる。

サンタバーバラの町に這入ったのは薄暮だった。後の自動車――高橋さんの――が遅れてゐるので約束に従ってオールドミッション前で待つ事にする。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(134) — 村島「アメリカ巡礼」(5)

「雲の柱」昭和7年7月号(第11巻第7号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(5)

羅府を中心にして

村島帰之

(承前)

オールドミッション

オールドミッションは、加州が未だスペインの領地であった頃建てられたフランシスカンの教会で、加州には現在三十ほど残ってゐるが、歴史の新しいアメリカでは、これを大切に保存して自分たちの歴史の一つとしてゐるのだ。

サンタバーバラのオールドミッションは、一七八六年の建立だといふから百五十年前のものだ。荒壁のやうな外廓で、正面の御堂だけがサブセン塔のやうな塔になってゐる。外は兵営か何かのやうな細長い平家で、圓柱の並んでゐるところに、寺らしい色を残してゐるだけだ。

時間が遅いから外郭だけ見て帰らうとしてゐると、黒衣の蠅のやうな紐をした僧が出て来て、案内をしてやるといふ。先生と私と田中さんの三人がその後に従ふ。

重い扉を押して中に這入ると、右の一室には洗礼の壺がある。木の蓋をとって見せてくれる。中は恰度絵具を解く皿のやうに幾つにも区画が出来てゐる。

堂へ這入ると、片脇に基督の像がある。色彩のついた石膏像だ。前に赤い電燈が蠟燭代りについてゐる。更に前へ進むと、中央ぐらゐのところの片側の壁の中に、聖フランシスの像が立ってゐる。二ブ色のガウンを着た貧者の姿だ。その向ひ側は児を抱いた聖アントニオの像がある。

壁といふ壁には、基督一代記の絵が處せまきまでに色美しく書かれてゐる。

正面を見ると、神々しい聖壇が立ってゐる。ひざまづいて祈るところまで進んでそれを仰ぐ。加州の第一次の知事もここでひざまづいたさうだ。

外へ出る。森だ。そしてその奥の方へ行くと、信者の墓がある。加州第一次知事の墓は御堂に接続した處にあった。僧は朝四時から夜九時まで勤めるのだといふが、折柄、呪文を唱する声が聞えて、次第に暗さを増して行く御堂の庭後を一層神祕なものとした。

庫裡でエハガキや鐘のオモチヤを買って、折柄到着した徳牧師、高橋幹事等と一緒に、賀川氏の後援者の一人であるハンモンド氏の邸宅へ行く。

ハンモンド氏邸

ハンモンド氏邸では数時間前から待ち兼ねてゐるところであった。

早速食事を共にする。主人公は未亡人で、子息は飛行工場の技師。令嬢――といっても三十ぐらゐの――と三人ぐらし。支配人の筑前さんは熱心な信者だ。

食後、再び町へ出で、レクリエーション・センターの白人の集會に臨む。満員の盛況だ。

仕方がないので外へ出て見ると、そこに一人の老いたる日本人が病気で倒れて田中さんの腕に抱かれてゐるではないか。聞けば萩谷さんといふ此の地方のバイオニヤ一の一人で豫て中風症だったのを先生の声咳に接しやうとして来て倒れたのだといふ。私は唯祈るより外はなかつた。やがて市の救急自動車に来て病院へつれて行つたが、その車を見送りつつ恢復の速かならんことを切に祈つた。

白人の講演がすんでから、賀川先生の事業の映画があつて、日本人講演の始まつたのは九時すぎ。先生もヘトヘトになつてゐて元気の出る筈はなく、とうとう二十分足らずでやめられた。

それから再びハンモンド氏の邸へ引返したが、先生は飛行技師の令息で飛行機の話に興を湧せて十二時近くまで話込まれる。

軍備反対の主張者

二十四日

目がさめると、ブルの家の客となつてゐる自分である事を発見する。窓の外は太平洋だ。周囲はひろびろとした庭だ。

庭のローンの中に、ドライブウエーがついてゐる。

ミセスが現れはれた。彼女はわが社の新渡戸博士を知つて居り、堂ブルホテルを知り、将棋を見たこともあつたりして、日本についていろいろと語る。

感心したのは彼女が平和運動者の一人で、各種の軍備反対運動のトラクトやパンフレットを沢山蔵してゐることで、彼女の部屋にはそれが本屋の店先で見るとく、ズラリと並べてあるのを見た。先生と私とはその幾つかを貰ひ受けた。

朝飯をすませて、出迎への西田さん其の他と共に写真を取りなどして八時半、サンタバーバラを辞す。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(135) — 村島「アメリカ巡礼」(6)

「雲の柱」昭和7年7月号(第11巻第7号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(6)

羅府を中心にして

村島帰之

(承前)

カガワストリート

今度は海岸沿ひのハイウエーを走る。サンマーランド付近では石油のやぐらが海中に沢山に立ってゐた。海の中から石油が湧くのだ。

ロサンゼルスに這入りがけに、カガワストリートといふのがあるといふので、そこへ車をやる。

小高い丘の東西に通ずる四間道路だ。町名標には明かに KAGAWA ST の字が読める。誰がつけたのか、賀川先生も町の名にされるやうになったのだ。

町名標の下に賀川先生を立てて記念の映画をとる。私たちも一緒に。

正午、YMCAに着。檀上でブラザーフードランチョンに出席、多くは此の附近の牧師さんだ(中には此の地の警察署長も交ってゐたが)。

先生は兄弟愛は飯を一緒に喰ふだけでなく、政治的、経済的にまで進む必要があると説いて大いに感動させた。

午後三時からアメリカ婦大大會。

さらに六時からロリウツドのハンターさんの教会の晩餐会。そこで、ハリウツドの青年代表がメッセージを朗読した。ガール代表のガルドストランド嬢は日本の少女の尊敬すべきことを述べて、

移民法の不可にまで及んでみたのは痛快であった。

晩餐会で役すみかと思ってゐると、何の事だ教会の説教もする事になってみやうとは。

先生は自分の宗教経験を話した。神秘的な先生の宗教経験を伺ったのは、アメリカではここが始めてである。集まった人々が先生の後援者ばかりだったので先生も安心して話されたらしい。会衆は金七百五十弗也を先生の事業に献げた。

八時半から告別大演説会。

告別大演説会

会場へついた時には、もう開会時間が迫って、司會者は會衆に讚美歌の練習をさせてゐる最中であつた。

今日が南加州に於ける賀川先生の最終の演説だといふので、聴衆は堂に溢れてゐた。その中に交つて共産党の連中が「今宵こそ賀川の集會をブッコわさねば又と機会がない」といふので、早くから會場のあっちこちに散兵を敷いてゐるといふ情報があつた。会場はだから一種の息づまるやうな殺氣と緊張にみなぎつてゐた。

プログラムが進んで、献金といふ段になると、果然「一文も出すな」といふ共産党員の野次が飛んだ。

先生は演壇に立つた。キリリと口を結んで。

演題は「神と歩め、大和民族」といふのだった。ピッチの高い先生のアピールは、聴衆の胸を射た。

共産党員の妨害

すると、何か一声野次るものがあつたのをチャンスに、共産党の連中が革命歌らしいものを歌ひ出した。

司會者は、その歌をもみつぶすために讚美歌の合唱を命じた。

讚美歌と革命歌の二重唱だ。然し、ともすれば讚美歌が革命歌に消され相に見えた。讚美歌には闘争的なトーンが乏しいからだ。酔っ払いを鎮圧するには十二分に力を持つ讚美歌ではあるが――。

この時、警官が大きな身体を會堂内に運んで来た。そして一人の共産党員が場外に拉致されて行つた。

この日、委員の諸君は、かねてこの事あるを予期して、共産黨員と覚しいものの傍にはそれぞれ監視者を配置してゐたので、彼等の妨害はそれ以上に出る事なくして終わったのだ。然し、主謀者の拘引と共に場外に出た共産黨員たちは、賀川先生の帰りを待ち受けて場外に網を張ってゐるらしく思はれた。

演説は続いた。先生は剛健なる精神を高調して渾々一時間を超える大説教を終った。聴衆は感激の頂点にあった。そして閉會後暫くは先生を取り巻いて感激の握手の雨だ。

やがて委員達は場外に待ち伏した共産黨員の裏をかくべく、豫て横町に準備されてゐた自動車へ押込むやうにして先生を乗せた。小川先生と私とが両脇に重って護衛し、フロントには田中さんと徳さんが。

自動車は田中さんの名ドライブで飛ぶやうに走った。共産黨員らしい自動車が後を追って来た。まさに活劇の一場面だ。が、田中さんの前もって考へておかれた道順は美事、彼等の追跡を外して了ふことが出来た。

私達は暫くして合同教會の高橋幹事の部屋に落ち着いて、先生の無事を喜ぶことが出来た。そこへ幹部の諸君が帰り着いて、心からなる感謝の祈りを捧げた。そして、高橋夫人の手になる夜食を頂き乍ら、殺気立った今夜の集会の物語りに花を咲かせて、何時果てやうとも思へなかつたが、数時間後には賀川先生を東に送らねばならぬ事を思し出して、みんなは名残り惜し気に散って行った。

これより先、賀川先生はロサンゼルスにおける日程が三日間延びたので、トロントにおける講演の日取りに狂いが生じ、これを取り返すためには、飛行機によって米大陸を飛ぶより外に道が無いのだった。

先生は飛行機料金が邦貨貳百円を越えるのをきいて、小川先生を汽車で立たせ、自分は一人空の旅を続けると言い出した。皆は心配した。

「どうしても小川先生を連れて行っていただかなければ、私たちは安心できない」と言い出した。然し先生は、

「貳百圓の金があれば日本では十人近くの失業者が一月養へるからね」と言ってこれを肯んじなかつた。

その時、これをきいた古谷氏の令嬢たづ子（一四）さんが「是非先生に小川先生を連れて行って頂くやうにと云って、自分の貯金から六拾圓の金を取り出し、先生の許へ届けて来た。頑強に小川先生同行を拒否してゐた賀川先生も、この涙ぐましい申出には、手もなく参ってしまった。そして

今宵は、小川先生同道でトロントに向ってアメリカを一飛と仕様といふだ。

出発が午前二時だといふので、幹部の人達は家へ帰る時間がなく、みんな思ひ思ひに合同教会の空き部屋、空椅子に横たはり暫くの時間を眠らうとするのであった。

賀川先生の航空大旅行

二十五日

うとうとしたと思ふと「もう二時過ぎましたよ」と隣室の小川さんに起される。小川さんは準備のため一睡もされなかったらしい。

午前二時半、いよいよ賀川、小川両先生は飛行機でロサンゼルスを立てれるのだ。「けふは、しみじみ村島さんが羨しいよ。モウ二三日ロサンゼルスにみたいがなア」と、先生は羅府への別れを惜まれる。実際、羅府の兄弟の友情は例えへやうもないほどに深いものがあつたからだ。

両先生と私と徳さんとは、田中さんの自動車で、夜更けの羅府の街を走る。街路は夜中に水で洗れてみて、まるで拭きとったやうに美しい飛行場は周囲を赤い電燈で囲んであつて、なほ高い塔の上ではサーチライトを照らしてゐた。

サーチライトといへば、私たちの宿泊に近い市庁舎の上にも航空用のサーチライトが照らしてゐるが、そのサーチライトを最初に照らした時には、フーバー大統領が羅府からスイッチを切つたといはれる。

風の方向を見るための吹流しの布袋が、朝風になびいゐる。見送り人は二三十名を越えたであらう。一同「また会ふ日まで」を合唱する。

先生は元気だ。みんな一人々々に堅い握手をされる。

サイレンが鳴つた。いよいよ出発だ。両先生が構内に這入る。栗鼠のやうに小さくて敏捷な徳牧師は、看視の眼を掠めて巧く構内へ這入つて了ふ。十二人乗の大型の飛行機だ。先生は中から手を振つてゐる。見送り人一同も手を振る。

やがて爆音勇ましく飛行機は滑走を始めた。そしてフワリと地上を離れたと思ふと、もう空高く舞ひ上つて、遠くへ飛び去つて了つた。みんなは、じつと胸に手を置いて一路平安を祈つた。

かくて、ロサンゼルスを中心とする南加の十二日間の先生の神の國運動のプログラムは一段落を告げた。しかし、それは先生のプログラムだけで、南加としてはこれからだ。牧師さんたちの腕の見せどころはこれからだ。

三時半帰宿、少し眠って、九時起床して見ると珍しい雨だ。まづ「先生の飛行機はどうだったろう」と心配する。飛行場へ訊くと、事無行ってみるとの事に安心する。

正午深田種嗣氏の来訪を受け、一緒に天ブラを喰べに行く。夫人、令息、令嬢同行だ。令息五歳は「僕。ヤロータクシーのシャフアーになって、沢山お金を儲けてパパとママにあげる」といふ。

ロサンゼルスは日本の延長だ。天ブラでも、すしでも、うどんでも、トコロテンでも、汁粉でも何でもある。

此の処、英語不用の看板をかけてもよささうだ。

深田兄と、

「このまま別れるのは惜しい気がするね。だがそうかといって」

とってお互いに別れを惜しむ。

弟と別れて行くやうな気持ちだ。深田牧師のお土産のポテトを高橋さんに貰って貰う。ポテトはベーカースフィールドの名物である。

(この号はこれで終わり)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(136)ー村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和7年8月号(第11巻第8号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(1)

サンペトロの日本人漁村を訪ふ

村島帰之

九月二十六日

賀川先生が出立されて了ふと一時に疲れが出てかがっかりして了ふ。殆どなす事なくじて過す。先生シカゴ安着の報来る。

二十七日

午前六時早天礼拝。定例の朝食の時「お一人になって寂しいでせう」とみんなから同情される。
午前十一時半から鶴浦牧師の基督教會で「街頭の十字架」と題して講演する。お腹がへってゐたので疲れた。講演の後、牧師邸で御馳走になる。

午後七時から合同教会の夕拝。みんなで先生の健康について祈る。

「どの講演の、どういふ節で恵みを受けたか」について証しをする。私は先生の健康が奇蹟であるといふ話を二十分ほどする。疲れた。

二十八日、二十九日、三十日、十月一日、二日、日記が約一箇月以上も滞ってゐたのを書く。

実際、此の三十日間は日記を書く暇さへなかつたのだ。朝は遅くも七時には起きて、夜は十二時近くでなければ、用事がすまないのだから。

その反動で朝も寝坊するやうになった。一箇月間の緊張がゆるんだのだらう（東部で聖戦をして居られる先生を思ふと、濟まない気がするが）九時近く、ノコノコと階下へ降りて行くと、高橋さんの部屋では、私のために、ちゃんと朝食を拵えて置いて下さつてゐる。高橋夫人が作つて下さる食前のオレンジ・ジュースと、食後のホット・ケーキのうまいこと。

訪問者が次から次へとある。賀川先生への揮毫の取次には弱らせられるが、先生への敬愛の情を知つては無碍にも断れず、忠ならんとすれば孝ならずだ。

福音時報の久保田さんに頼まれて「幻滅のアメリカ」一篇を草する。羅府新報からも、松浦記者が見えて、何か日本のことについて話といふので、尖端的都會風景を一時間ほど喋舌る。いつも他人を訪問して記事にしてゐる自分が、反對にインタビューされるのだから少し勝手が違ふ。

昼飯は近所のランチへ行く。メキンカンなどと一緒にスタンドに向かつて腰かけてたべるのも面白い。此の辺は日本人経営が大部分だから、日本へ帰つたやうなものだ。洋食がほしくない時には、うどん屋に這入ったり、天ぷら屋に這入る。

晩飯だけは羅府の銀座ともいふべきブロードウェー街へ出て、カフェテリアなどに這入る。ここへは日本人が殆ど来てゐないので、外國だな、といふ気が初めてする。

（二十八日から十月二日までの日記が不鮮明なのは、滞つてゐた日記を書上げるのに忙しかつたのと、もう一つは、書上げた分を徳牧師に目を通して貰はうとして同氏へ托して置いた間、つひ、

書き落して了ったためだ。この間が、私がホッとしてみて、何も手につかなかったと思って貰へばいい)

西田惣五郎氏

十月三日

前夜の約束に従って午前八時、西田惣五郎氏が自動車で迎へに来て下さる。サンピトロの漁村を案内してやろうと云って。

取敢へずバーチ街の西田氏邸に行く。このあたりは一带の黒ン坊地区だ。

「白人の住宅区域にみると此方が遠慮しなければならぬが、黒ン坊街ではその気兼ねがゐらないから善いです」

と、西田さんらしい言葉だ。西田さんは熱心な基督教信者で、三重県山田の人。先年までは三重県人会長を勤めてゐたといふ徳望家だ。

令嬢さち子さんはピアニストで、三箇所に教習所を持ってゐられる。朝飯を頂いて後、暫くさち子さんのピアノ演奏を聞く。宗教的音楽を。

「ジャズ音楽は動物的で嫌ひです。日本音楽も始めてゐます。六段だの春雨だの」

さち子さんはアメリカ生れだが、日本語も上手だ。日本は未だ見た事がないのだが。

十時、西田さんのシャフアーで出かける。さち子さんもサンペトロへピアノを教へに行くので同行する。

途中、ピーチアンブレラをかぎして道端で貳拾五銭の辨当を売つてゐる娘を見かける。ピーチへ行く連中相手の商賣だ。

ピーチ行といへば、水泳着を手にした青年がわれわれの自動車に手で信号して乗せてくれといふ。「ホルドアップ」が怖いので誰も乗せてはやらないらしい。

ロサンゼルス町を出ると一带の畑だ。西田さんが曾て百姓をし、農業組合を作つてゐた事のある所だ。此の辺一带の作物は皆日本人の手になるのだと聞くと、ひとしほなつかしい気がする。

けふは土曜なので畑は休みだといふ。なぜ土曜が休みかと訊くと、日曜日は青物市場が休みなので、市場へ積出す野菜の摘取りの必要がないからだといふ。盆と正月以外に年中休日を持たぬ内地の百姓とは大分趣きが違ふ。

この辺の百姓は一人平均一日に二町位は鋤く□ラクターを用ふからだ。日本の農村でこの式を採用したら、一体日本の小作人はどうなるといふのだらう。

お百姓のトラックが空で走って行く。今朝、ロサンゼルスで青物市場へ野菜を運んで行った帰りなのだ。後から追ひついて運転台を見ると予想に違はずいづれも日本人であった。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(137) — 村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年8月号(第11巻第8号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(2)

サンピトロの日本人漁村を訪ふ

村島帰之

(承前)

サンピトロ

サンピトロの海岸に近づくと、石油タンクが見え出した。西田さんはこれが重油のタンクで、日本海軍の特務艦がわざわざ重油の積込のため此處へやって来ると説明してくれる。重油はロングビーチは勿論、遠くはベークスフィールドの方からパイプで地下を送って来んださうだ。

サンピトロは島になってゐる。そこへ渡る大栈橋は開閉式になってゐる。サンピトロへ盗人が逃げ込んだ時、この橋をあげて島内一面を搜索した事があつたが、島が大きい上に、港には多くの船があるし、材木置場などがあつて到頭捕らなかつたといふ。

私たちはサンピトロ教會と國語學校を見、白石牧師を訪ひ、さらに日本人の漁師町へ行く。日本の漁師が約六百戸、その人口約二千。大部分は和歌山県の出身者(特に東西牟婁郡が多く海草、那賀が之に次いでゐる)で、静岡県人が少数交つてゐる。

漁は主としてまぐろ(トンボシビ)、かつを、いはし、さばの類だが、まぐろは数年前から寄りつかなくなり、またかつをを以前は、これだけで一年の費用が取れたものだが、八月以来、政府の保護法によって五パウンド以下のものの漁獲を禁止されて了つたので、これまたとれても役には立たず、いはしは罐詰會社が買ってくれぬのでこれもダメ。魚油も元は一ガロン四拾五錢してゐたのが今は拾五錢に下り、肥料も日本の肥料安がこたへて、六拾五錢から參拾錢に下つたので、何も彼

も不況といふ有様だ。

歐洲戦争の頃には日本の漁夫が千三百人もゐて、此の漁場の半数を占めてゐたのが、今日では八百人に減って、漁場全員の三割に減って了つた。不景気なので元の百姓に変わったり、他に岸を変わった者が多いからだ。

日本漁師村

漁師の村はザツとしたバラックだ。罐詰會社の建てたものだ。全く同一型のものが数百戸行儀よく並んでゐる。家賃一箇月六弗だといふ。

でも、入口のパーラーには、青い草花などを飾って楽しんでゐる。南加漁業組合の理事の一人中川新太郎さん（和歌山県下里の人で、熱心な基督教信者）が、私の自動車の傍へ来て漁業の不振を語ってくれる。

この辺の漁は日帰りの釣船もあるが、メキシコ方面へまで出かけるのが多く、出漁すれば一箇月も帰って来ない事が多いのだが、近頃は前にいったやうな不況で出漁が少く、遊んでゐる船が多い。

船は船主一人の専有の場合もあれば、また五人位の漁夫と協同で持つてゐるものも有る。何しろ、一艘一萬弗もするのだから、多くは罐詰會社から金を借りて、月々の魚代で償却して行くのが多い。

罐詰會社は七軒（いづれも白人の経営）あつて、漁師の漁獲は約千六百噸ほど東部へ生のまゝ送る以外は全部罐詰會社で買ふのだが、以前と違って、近頃はアメリカを挙げての不景気のため、罐詰の需要がぐんぐんと減じ、漁師が持込んで来る魚を、その儘全部受付けるといふ事がない。何だかんだと言つて、制限を加へるので、漁師は以前のやうに漁が多くさへあれば儲かるといふわけには行かなくなった。若し罐詰會社がとつてくれなければ他にこれを消化する道のない彼等なのだから。

彼等の家庭の食卓を賑はす魚なら、サイズの小さすぎる落第品で結構だ。それに魚は一匹々々えさで釣るのだから折角捕つて来ても、罐詰會社にロックアウトを食はされてはくたぶれ儲け以上の損である。

右のやうな不況のため、鮪漁などは出漁中止をしてゐる向が多くて、今日も日本人の船が五杯休んでゐるといふ事だった。五杯といつても少くも十二人の乗組員を有する発動汽船だから合計六十名の日本漁師がミスミス仕事を得ずにあるといふ訳で、問題は大きい。此處サンペトロの日本人漁

師村の不景気が知れやう。

日本人も、以前は罐詰会社を持ってゐた事があつた。今も「東洋」と名のつく罐詰会社が残つてゐて、白人によって経営されてゐるが、これなどは日本漁師華やかなりし頃の名残りが僅かにその會社の名に残されてゐるものなのだ。

日本人は資力が細い。日本の銀行も彼等をバックしない。日本人が船を買はうとしても、それは会社かブローカーの手による外道はない。高い利子でかりた金がうまく廻らなかつたら、彼等はブローカーの奴隷になり下る許りだ。

近海漁業をやつてゐた頃の船は精々二十馬力の発動汽船で事足りたが、遠洋漁業の今では百馬力以下の船では仕事が出来ない。目下十萬弗をほうり出して大漁船を建造中の白人の船主もあるといふ。これでは資力の細い日本人が太刀打の出来ないのも道理だ。

そこで多くの日本人は船を持たずに、白人の船主から船を借りて漁に出かけるのだが、十人位の日本漁師が組んで、一隻の船を白人から借りたとして、採算はどうなるか。大形満船百噸の漁があつたとして、その値ひ六千五百弗——これがその儘、日本人漁師の懐ろに這入るのなら、日本漁師萬歳だが、ドッコイさうは問屋が下してくれない。四割五分——三千二百弗は船の借賃として船主の懐ろへ這入つて了ふ。べら棒に高いと言ひ給ふな、諸事に物高なアメリカの話なんだから——。

その他えさ代だ、ガンリンだ、何だかんだと、雑費が二千弗は消えて了ふから、残る處は僅か一千弗。これを十人の漁師が分配をするのだ。一人分前約百弗これが一箇月も波荒いメキシコの手へ出かけて行って漸くに稼ぎ得た純盆なのである。

これがそれぞれの家庭に於ける何人かの家族の生活費なのである。更にこれは運よく仕事のあつた漁師の収入であつて、出漁中止の漁師には望まれない収入なのである。

日本の漁師は、だから謂はば罐詰会社と船主とブローカーの奴隷として、その搾取する儘に働かされてゐる長良川の鵜なのである。殊に罐詰会社などはこの頃の不況による減収をのがれやうとして、季節以前の漁獲は一応は時價で引取りはするが、シーズンになって値が出ればよし（勿論値が暴騰したら儲けはその儘會社の懐ろに入る）若し價が下れば、それを漁師の頭の上に転嫁して、損害をまぬがれぬため、魚を買込むに當つて時價額面の三分の一はホールすると稱して一時預りの形式をとつてゐる。會社はこれで危険をまぬがれやうが、惨めなものは日本の漁師である。

私はかうした日本漁村の悲しい話をきいて憂鬱とならざるを得なかつた。

サンペトロと言へばアメリカを通じて最も多く日本の漁師の居る處だ。モントレイにも日本の漁

師は居るが、地理的に恵まれないで、此處とは比較にならない。又加州以外には日本人に漁業権を許してくれてゐる處はどこにもない。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(138) — 村島「アメリカ巡礼」(3)

「雲の柱」昭和7年8月号(第11巻第8号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(3)

サンペトロの日本人漁村を訪ふ

村島帰之

(承前)

漁師の二世

日本の漁師には青年は居ない。その筈である一九二四年以後は日本人がやって来ないからだ。又寫真結婚の禁止で一九二四年以後は、日本から女房を探して連れて来る事が出来ないのだから若い女も居ない。

然し日本からの補充が絶えたとしても、アメリカ生れの二世が漁師として親に代って働かうではないか——と云ふ人もあらう。然し漁師の多くは一九一五年から二四年までの間に寫真結婚をした人達だから、二世も十五歳以上のものは殆どゐない。第一世の日本漁師にこの二世が一人前になるまで、老ひさらばえた身を、暑い日光の直射にさらして猶数年を我慢したら、漁具を二世に譲って安樂が出来るのだらう。

いいや、それは恐らく夢として終らう。

日本漁師の二世はどこへ行く。

日本漁師の後継はどうなるだらうか。

二世達は、今多くはアメリカの小學校へ通つてゐる。そして両親の國の言葉を分る為、別に、日本語學校へも通つてゐる。彼等は小學校を出たら更に口イスクールに這入るであらう。いかな貧しい漁師でも、月謝の要らない口イスクールには必ず入れるに違ひない。いや、現に其處へ行つてゐる子供達も少くない。

其處ではアメリカの市民として、彼等は白人のお友達と同じやうに學び、同じやうに遊び、そして同じやうに将来を夢見てゐる。彼等のうちの何人が果して、天日に赤く皮膚を焼く漁師の業を、自分の将来の仕事として夢見てゐるだらうか。

漁師のある家からはピアノの音のきこえて来るのを聞いた。ピアノ！ 驚くには足りない。中古なら百弗以下でも買へやうし、アメリカに發達してゐる月賦制度を利用するなら、千弗のピアノも買へやう。日本漁師華やかなりし頃に、その子の為め、妻の為め、ピアノを買込んだ漁師も少くはなかつた。

そのピアノを弾きながら夢見つつある二世の夢！ それは、日本漁師一世が望んでゐる處と果して同じだらうか。

「恐らくは、二世の中で半分も漁師としては残らないでせう。そして大部分の二世達は加州の農村に散らばつてゐる日本人二世と同じやうに、華やかな都會に憧れて、両親の期待に反する仕事に就くのでせう」と案内役の西田さんが語つた。

若しさうだとすれば、此處の日本人漁業も一代限りになるのではあるまいか。

罐詰會社を見る

私達は、それから、一つの罐詰会社を見た。大きな機械仕掛けで生鰹が網に入れられ、蒸され、人の手によって綺麗に整理され、罐に詰められ、十分とは経たぬ内にレッテルまで貼られた一個の商品の罐詰になるのであつた。

蒸された魚を整理する仕事には、多くの日本人の女がメキシコ人などに交つて働いてゐた。一時間賃金で三十五セントになるといふのだから、一日八時間として、三弗近くにならう。さうすれば漁不況の折柄望ましい仕事だが、これは年中続く仕事ではなく、罐詰界不況の折柄、一週間に精々二日位しか仕事がないといふから、この方でも日本漁師の家庭は全くロックアウトされてゐる形だ。

蒸気の熱で蒸されるやうに暑い罐詰会社を出て、海岸に涼風を入れ乍ら立つと、其處には数十隻の漁船がつながれてゐる。そして、それが日本人の漁船であるといふことは、舷側に書かれた日本語の船名で直ぐうなづかれた。これが先にきいた出漁停止中の鮪船なのだらう。

漁船に乗る

折から来かかつた一人の日本人漁師に案内されて、その中の一隻に乗り込んで見た。太いロープ、頑丈なチェーン、それは幾百度、メキシコの荒海を乗切つて来た功績を語るものであらねばならな

かった。船底をのぞくと其處には幾つかに仕切った大きな船艙がある。

「これはアイスボックスですよ。釣上げた魚はその儘こゝへ入れて、腐らないやうにするんです」

船の中央へ行くと、数十本の物干棹のやうな釣棹が並べられてある。デッキの其處此處には軍艦の信号兵が旗を振る際に立つ台のやうな、水面に向つて突出た處がある。漁師達は荒海の中で、その出張った處に突立った儘、その太い釣棹で魚を釣るのだ。

「随分力のいる仕事で、そしてかなり危い仕事ですよ」

西田さんはさう言つて説明した。デッキに上つて沖を見ると、アメリカの軍艦が十数隻並んでゐるのが見えた。

岡田さんと白石牧師と私と三人は、付近のチャイナ館に這入つて昼飯を食べた。その辺一帯のストアは皆日本漁師相手に商ふてゐるもので、漁業不況の今日では、このストアから品物を借買ひして払はずにゐる向も少くないやうな話だ。

食後、暫くして、私達は教會前においてあつた岡田さんの自動車でロサンゼルスに帰る事になつた。學校前の一軒のハウスをピアノ教習所にしてゐる西田氏の令嬢が出て来て、

「御飯と一緒に食べるつもりで仕度をしてゐましたのに」

と言はれる。

此處からロングビーチは恰度湾一つを隔てゝゐるので、夜の美しさは又格別だといふ事だ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(139) — 村島「アメリカ巡礼」(4)

「雲の柱」昭和7年8月号(第11巻第8号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(4)

サンペトロの日本人漁村を訪ふ

村島帰之

(承前)

羅府港埠頭

日本の漁師村にアバユウをつけて、程近い波止場につく。日本郵船會社のつく處、いはゆるロスアンゼルス港である。羅府港にはいっても羅府市の中心へは二三十哩を隔てた處にあるのだ。私達は、港内を自動車で見てもはった後、元来た道をロスアンゼルスへと走らせる。

途中大きな材木置場があったので、西田さんにきいて見ると、オレゴン松だといふ事である。これが日本の津々浦々にまでも運ばれて行く處の日本名の米松だと思ふと、一種の感慨が湧くのだった。

サンペトロの島を離れると、遊船らしい船が沢山にもやってみるのを見た。西田さんにきいて見ると、これがすべて酒呑の偽りに用意された船だといふのだ。アメリカ内地では公然酒を呑む事を許されないアメリカ人が（或は日本人が）この船を借りて國法の及ばない沖合数十哩に船出して、其處へカナダから、或はメキシコから来る酒船につけて、其處で天下晴れて酒をのむのださうだ。友がピクニックのつもりで、國境を越えメキシコまでドライブして行き、そこで強か酒を飲んで即日アメリカへ戻って来るのと好一對の、禁酒國の悲喜劇である。

「そればかりぢやありません、ロスアンゼルスあたりでは小さな店にグロサリーを並べて、こちらでは酒を呑ましてある家は何軒あるか知れやしませんよ。表で野菜を買ひに来るお客を待ってゐる、その家の女房は実は、警官の来るのを見守ってゐるのです。この家では酒を飲まず外に、賭博もやらせるので、日本人でこれをやってみる向きが決して少なくはないのです」と西田さんは嘆かはし相に話した。

シグナル・ヒル

私達はロスアンゼルスに這入る前にロングビーチをドライブし、特に海中に作られた圓形のドライブウェイを走った後、石油の宝庫シグナル・ヒルを見る事になった。此處は全日本が一箇年に産出する石油を此處だけで一箇月間に産出するといふ石油の宝庫である。加州は、いやアメリカは、この無尽蔵の宝庫によってどれだけ恵まれてゐるか知れない。

眼前に展開する小丘の上に何と夥しいやぐらの林だらう。それが悉く石油を汲出す油井戸なのだ。一個の油井戸から一昼夜にどんなに少くとも五百バール、多きは千五百バールの石油を汲上げるといふ。一バールといふのは四十三ガロンに当たるといふから、最小二一五〇〇ガロンに相当する油量だ。

これでは一台の井戸の建造費が十何萬圓以上を必要しても、直ぐに消却が出来て了ふ。

石油井戸の林

私達は油井戸の林の中を分け入って行った。不思議な事には、油井戸の林の間の中に、墓場があったり、人の棲まぬ空家があったりするではないか。

私の不思議がるのを見て、西田さんの説明して呉れるのによると、此處は以前も盛んに油を汲んでゐたが、いつの間にか脈が尽きたと見えて油が出なくなった。其處で、これを放棄して住宅を経営して墓場まで出来たのであったが、その後、或人が、従来の地下四十尺ほどしか掘下げなかったのを、試みに思ひ切つて地下約一哩ほどまでボーリングを入れて見ると、油がこんこんとして湧いて来た。

それを見習つて、あっちでも、こっちでも地下一哩までボールを入れて見ると、出るは出るは石油の泉！ もう油脈は尽きたとしてあきらめてゐた連中があはて出した。そして瞬く間に住宅は取り払はれて、殆ど空間のない程密接して数千の油井戸が建てられた。

油井戸と言っても、その面積はやぐらの間に八坪を出でないもので、それが一二間を隔てて藪のやうに立ってゐるのだから天下の奇観でなくて何だ。

やぐらは半町以上もあらうと思ふ處の高さに組まれて、ピストンの動くに連れて油が汲みあげられる。数百数千の油井戸がコットンコットンとピストンを動かしてゐるのは見てゐても面白い。

何しろ、油井戸一つで一日に萬に近い量を稼ぐのだから、その土地を所有してゐる地主の懐に這入る地代も夥しいものがあるに違ひない。私達はこのヒル一帯の大地主であると共に大金ちである人の家を覗いて見たりした。

ボロイのは地主ばかりではない。大小の石油会社はなほボロイ。そこで彼等は血眼になつて脈を探してはボールを地下深く突込んでゐる。

私はまだ山のものとも、海のものとも分からない試験中の井戸を見た。動力によって管が次第々々に地下にもみ込まれて行つて反對に又地下水が地上に送りあげられて来る。やがて脈に突当てるのかも知れぬが、見た處は、こんこんとして泥水が湧き出る許り。私は正直爺さんの話を思ひ出して微笑んだ。

スタンダード會社や、リッチヒールドや其他多くの石油會社は、出るか出ないか分らない井戸を掘るために、互に争つてこの辺の土地をかりてゐるといふ事だ。耕作もせず、家も建てず、それかといつて井戸もまだ掘つてゐない、廣々とした土地が至る處にあつた。賭博といふよりは、此處もと一番掛合の奇術と言ひ度い。金儲けは賭博であり、奇術である。

猶、近來の不況と、石油の増産の為に、石油聯合会が申合せて三昼夜の割合で生産制限を行ってゐるとかで、ピストンの翼を休めてコトツとも音のしない井戸もあった。

私達は油井戸の中を見て又再びサンペトロの大道路に出た。サンペトロからロサンゼルスに通ぶる大道に都合八本、いづれも幅員百尺以上のものだが、沿道の地主がその所有地の地價をあげる為め競ってつけたものだといふ。

道端にはビーチパジャマのやうな粉飾をした店があつて、或は果物を賣り或はチキンを食べさせてゐる。やがて鉄道の附近へ出ると、そこには大きな青物市場がつくられてゐる。これは鉄道会社が土地繁栄のためにロサンゼルスの青物市場に對抗しつつ作ったもので、中央の廣場には、八尺づつを区切って、トラックを置けるやうにしてあるが、附近の百姓は月拾圓の借賃を拂つて、その八尺の土地へ青物を満載したトラックを引込み、その儘で青物を賣る組織になつてゐる。

そして二十五年間連続して此處を借りてゐたら、その土地の所有權は借主に移るといふ契約ださうだ。周囲には在來のやうな市場式店舗もあつて、其處に沢山の青物のストックがあつた。これは前記のトラックの儘、売買するのと違って、他の地へ送り出すものが多いやうだ。

私は阪急電車が宝塚歌劇場を經營し、住宅を經營してゐるのを思ひ合せて、産業方面に力を注ぐアメリカの鉄道の方針を面白く思った。

私達の自動車は――とはいふが岡田さんがドライブしてくれて、私一人がお客さんの、二人っきりの自動車なのである――は、漸次ロサンゼルスに近づいて來た **good ir** と横つ腹に大書したツェツペリン式の飛行船がとんで來る。それは自動車のタイヤの廣告である。都會の中心に來たといふ意識がして、呼吸もつまる思ひだ。

かうして西田さんの案内で、ロスアンゼルスの近郊を丸一日かけ廻つた私は、やがて合同教會の宿舎へ送り届けられた。今日一日を振り返つて色々の感慨が湧いて來る。

#

#

羅府の兄弟達！

今日、昭和七年の七月十一日、アメリカへ向つて日本を發つてから恰度一年目です。

私の生涯を通じて、昨年のアメリカの旅が、そしてアメリカにおける皆様の御親切が、忘れる事の出来ない感銘を与へてゐることは御想像以上のものがあります。だのに私は帰朝以來八箇月、ま

だ一通もアメリカへ感謝の手紙を書かないのです。御礼状も、クリスマスのお祝ひも年賀状さへも。

然し、それは私が皆さんの御好意を忘れてゐるのではないのです。御好意が肝に銘じてゐるだけに、短い手紙では感謝の心が書き表せない儘つひ怠って今日になったのであります。

私はこの「アメリカ巡礼」を書く毎に、どんなにか皆様をなつかしみ、皆様に感謝してゐる事でせう。「アメリカ巡礼」もロサンゼルスに入ってから、書く事が多すぎるので、アメリカで書き切れず、内地へ持ち越し、今日此の頃になって、ノートの覚書を見返しては当時を思ひかへしながら書き綴ってゐる有様なのです。

羅府滞在一箇月の事共が、この日記を書きながらパノラマのやうに思ひかへされて来ます。合同教会を中心とした日本人街をバックとしてクローズドアップされて来る懐しき人々。

起き臥しから食事萬端のお世話をして頂いた高橋幹事夫妻。萬事の指圖をして下さった徳牧師夫妻、私の為には足になって自動車を走らせて下さった高橋兄、井ノ下兄、榊中兄、田中兄、私のために近郊の案内をして下さった西田兄、瀧澤兄、私の身体の心配をして下さった平田ドクトル、古本屋の案内をして下さった静岡兄、御馳走をして下さった古谷兄、植松兄、清水兄、其他親切な各教会の牧師さんがた等々々。私はそのお一人々々に夫れぞれ長い手紙を書かえばならぬのですが、帰朝以来、講演に引張り廻されたり、旅行をしたり、病気をしたり、それに新聞社の仕事があつて、目の廻るやうな忙しさの中に置かれて、それを果たせないのが残念でたまりません。

今日も私は社の仕事に疲れて、病床にゐるのです。今度、病気がなをったら、今度こそ、本当に順々に手紙を書いて行き度いと思ひます。果たしてゐない約束をも果たして行きます。どうぞ悪しからず御許し下さい。

「羅府近郊」を書きながら、ふと皆様に物を言ひ度くなつて書いて見ると、矢つ張り、詫状になつて了ひました。皆様の上に御恩寵を祈りつつ。

(この号はこれで終わり)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(140)－村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和7年9月号(第11巻第9号)への寄稿文です。

アメリカ巡礼(1)

羅府・ハリウッド

村島帰之

羅府監獄へ

十月四日

今日は日曜日だ。早天礼拝を済ませて午前九時、南加クリスト教聯盟社會部の斎藤さんの案内で監獄見物に出かける。但し、今日は在監中の日本人のために、教会の人達が説教するので私もその説教隊の一人に加はるのである。

市廳舎の裏手、小高い丘の上に建てられた十階建の堂々たるビルディング、それが監獄だと教へられた時には一種異様な思ひがあった。が、さらに其處は裁判所との同居だときいて、多分八階以上の上層に窓をひろく取って、光線を十分に吸収してゐる部分が裁判所で、八階以下の窓の小さい、見るからに暗さうな部屋が、てっきり監獄だらうと思つてゐると、豈はがらんや暗いのが裁判所、明るい方が監獄だと聞かされて、驚きを再びした。

「ゴリキーの「夜の宿」の歌に、牢屋は暗いふのがありますが、此處ではあべこべで、牢屋は明るいといふ訳ですね」

と、同行の南加大學で犯罪學専攻中の徳さんを顧た事だった。

ホールの中へ這入ると、さすが、日曜だけあって、裁判もなく、被告らしいものも、傍聴者らしい人も見えないで、ただ数人の白人があるだけだ。

「あれは救世軍やその他白人の教会の牧師さん達で、私達と同じやうに、在監囚人へ説教をしに来てゐる連中です」

と説明される。其處へ知合の東條さんその他が、日本語の聖書や讚美歌や、それにヴァイオリンまで携帯してやって来る。

正面の時計が十時を指すと、奥手のエレベーターが上から降りて来た。私達はそれに乗せられてするすると八階に上る。

陽は明るくさすのに、そこには銀で鍍金した鉄の格子が娑婆と監獄との境界線を引いてゐる。

ピストルを腰にした看守がその鉄の格子を開けて我々を中に招じ入れた。

ああ、我等は完全に入監した訳だ。見よ、私達の背後の格子は再び閉められて、大きい錠が掛けられたではないか。

「もう逃げやうたって逃げられませんぜ」

東條さんが冗談を言ふ。白人の看守も分らない乍ら、その言葉を察してほくそ笑む。

監獄を出る時に、囚人を連れ出すやうな事があってはならぬといふので、代表者の名前と一行の人数だけが記帳される。本当なら、各自が一々サインし、出監の際再びサインして、二つのサインを合せ、決して替玉をしてゐない事を立証させるのだが、我々がミニスターだといふので、信頼してその手続きをとらないのだ。

携帯品の検閲も同様省れて、私達は案内者もなく、勝手知った斉藤さんを先頭に、監房の方へ這入って行った。

そこは狭い動物園に異ならない。両側は三寸あき位の眠の格子のはまった檻が、長屋のやうに連つて、その中にカーキ色の囚人服を着た囚人達が、檻の中のライオンのやうに、絶えずあっちこっちと歩き廻つてゐるではないか。

彼等の歩いてゐる處は、二十人位の共通の廣場で、その廣場を前にして、小間の寢室が作られてゐる。寢室は上下一組の寢台によって形成されてゐる。ベッドの傍には手洗場と便器とが置かれてゐる。便器と言っても日本のとは違って水洗式だから臭くもないだらう。

手洗の上の小さな棚には小さい鏡が置かれてあつて、監獄に居ても、見づくろいするだけの自由は許されてゐるらしい。

私達は、やがて、とある監房の前に立つた。おお、其處には懐かしき日本人が十名あまり！

私は腰天から脊髄へ氷が走るやうな気がした。此處は日本人のみの監房なのである。

斎藤さんが檻の中へ首を突込んで挨拶をした。そして、日本から私が来てゐる夢を話して、これから話をして貰ふ、とみんなに紹介した。

私は言ひ知れない感激を抱いて、斎藤さんと同じやうに、鉄の格子を握りながら首を中へ突込むやうにして話かけた。十人あまりの同胞はさすがに日本人らしく床の上にきちんと端座して円陣をつくつた。

「どうかあぐらをかいて下さい。そして自由に聞いて下さい。私も自由に話しますから」
でも、誰一人膝をくづすものはない。私は日本の近状を先づ話してから、身体は拘束されてゐても、魂はくゝられてはゐない。今こそ静思の結好の機會だ。と言って冥想の話をした。

話が終わると、同行者の一人が弾くヴァイオリンに合わせて、みんなで讃美歌を歌った。
此処はアメリカの監獄であるが、歌は日本語の讃美歌である。格子の空間から差し入れた讃美歌集を受け取って、囚人達も一緒に合唱した。コンクリートのホールに讃美歌が反響する。ゴシック式の教会の中では味はへない感激だ。

私達は檻の内外から堅い握手を交わした。携へて来たキングや講談倶楽部を差し入れ、又読み古しの邦字新聞を渡して、日本人らしくお辞儀をして、見送る同胞の囚人を後に其處から去った。

日本人の囚人は十階にももう一群、拘束されてゐた。私達は前と同じやうに話をし歌を歌った。

これ等の日本の囚人達は、多くは酒の密造か密賣で収容されてゐるものだ。
「何しろ五勺位の小瓶一本の酒が一弗にも売れるのですから、つひ法を犯す気にもなるのでせう。殊に日本人の作った酒はうまいとって、評判がいゝと言ひますから」

「彼等は改心しますかね」
「入監中は色々面倒を見てやる私達の手前丈けでも、改心して二度と再び罪を犯さぬとちかかってゐますが、いよいよ外へ出るとなると、ボロい儲けがあるので、どうも改心が出来かねるやうです」
斉藤さんの説明に、私達は心が暗くなる思ひがした。

元来た這を引返して行くと、白人の囚人を前にして、救世軍の女士官が美しい声で説教してゐた。私達はその前を遠慮勝ちに通つて事務所の方へ行つた。其處ではジャズバンドの稽古中だ。

「監獄の外から來てるのですか？」
「いいえ、囚人がやつてゐるのですよ。改悛の情の見えたものは、かうして檻の外で音楽の稽古をする事も許されてゐるのです。尤も、監獄の外へは滅多に出してくれませんが」

私達は軽い気持ちでそのバンドの一人にグッドバイをした。彼もまた自分が囚人である事を忘れたやうな態度で、愉快相にグッドバイを返した。
新聞を賣りに來てゐるものもあつた。

書落したが、此處は加州ロスアンゼルス郡の監獄で、六箇月未満の懲役囚を収容する處、六箇月以上のものは桑港近くにある加州州立サンクインテン監獄に送られるのだ。私達は看守達のニコニ

コ顔に送られて鉄格子の外に出して貰った。

「どうやら無事出獄が出来ましたね」

「お目出度う」

みんなは笑ひ合ったけれど、獄内の邦人囚人の事を思ふと、私はどうもシンからは笑へなかった。

午後二時から合同教会の婦人会で賀川夫人の話をする。泣いて聞いてくれてゐる聴衆もあった。そして若干の浄財があつめられて賀川夫人に送られる事になった。

然し現金を贈れば決して夫人が自分の用に使ふ筈がなく、賀川先生の事業の方に廻されて了ふに違ひないと話たので、その半分は夫人及び子達のために品物を買って送る事にきまつた。

婦人会が済んでから、私は榊中幸一氏夫妻の案内でロスアンゼルスの見物に連れて行って貰ふ事になった。榊中氏の運転で。

先づ近頃有名になったマクハーソン女史の教会を見に行く。彼女はサバーゴスペルの一派で癒しをもやるので評判なのだが、何かしら民衆を引きつけるものがあると見えて、日曜説教などは数千人を容れる會堂が一杯で這入れないといふ。

私達が行って見ると果して満員で門外に溢れた人々が帰らうとしてゐる處だった。

マックハーソン女史は本年四十三歳、一昨年は海岸で誘拐されたと言って騒がれ、又最近は三十四歳になる男と結婚し、しかも飛行機でロネームーンに出かけるなど、兎に角、尋常人でない事丈けは間違でない。

自動車は新たに開けた山手を走って、ロスアンゼルス市立公園へ這入る。鬱蒼たる林だ。湖もある。然し以前は此處ら一帯は禿山で、全く見捨てられてゐたのだが、羅府の発展と共に、この禿山を緑化する為に、市が大規模な植林をやつたのだといふ。緑陰を行くと、到る處水道のパイプが引込まれて、水がふんだんに樹木の根を霑してゐる。

この森林を縫ひ、湖水に添って多くの自動車が走って行く。多くはこの日曜を幸ひ、愛人を携へて行く連中だ。中には、眺めのいい緑陰にミシンを止めて、若い男女が抱き合つてゐるのさへある。然も誰一人それを笑ふ者もなければ、岡焼をするものもない。「彼等をして、ほしいままに生命を楽しませよ、我等も亦かくすべければ」と言つた態度だ。

かうして自動車によるランデブーに利用される公園だけに、夜八時以後は戸を閉めて、入園禁止といふ規定がある相だ。羅府らしい公園ではある。

私が民衆娯楽の研究をしてゐるときいて、榊中さんはハリウッドボールへ案内してくれた。ボールと言っても球ではない。野外音楽堂だ。無雑作に丘の斜面を切落して、数千のスタンドを造り、正面にはお椀を半分に切って伏せたやうな恰好をしたステージが作られてある。一箇月前には関谷敏子が此處で歌ったといふ事だ。スタンドの観客席には前面を特別に設備して、所謂特等席としてあるのもアメリカらしい。

ボールを出て暫く行くと、山の上に十字架が見える。それはピリグメイジシャターとよばれる野外劇場で、山上の十字架は、今、アメリカで評判のクリスト劇、グリーンパスタチャーがつかつたものだ相だ。

此處は興行のない時は入口の扉が閉ざされてゐるので這入る事が出来ないが、ボールと反対に、山のスロープが一帶に舞台として使はれて、反対側の方から見る事になってゐるのだといふ事だ。年に二箇月位しか開場しないが、いつも千人からの客を集めるといふ。夜間開演のだから、この大規模な舞台に対する照明の如き、大したものだらうと思ふ。日本にもこんな大野外劇場があつたらと思つた。

続いて、グリーキ・シャターへ行く。これは三年前に建てられたもので、前の二つ程には自然が取り入れてはゐないが、矢張り屋外劇場でギリシャ式の石の舞台が千五百のシートに面して立ってゐる。

ボールと言ひ、野外劇場と言ひ、グリーキシャターと言ひ、青空を天井とした劇場は、年中殆ど雨の降らないアメリカにでこそ、建てられるもので、多雨國の日本などでは、とても望まれないものだ。

帰りには早川雪洲華やかなりし頃の彼の住宅の前を通つて、一先づパタデナの榊中さんの家に到着く。榊中さんはランプのシェードを商つてゐられるのだが、熱心なイエスの友の幹事で本誌「雲の桂」の配布を殆ど一手でやつて來られた熱心家だ。

氏のお宅で御馳走になつてから、さらにその案内で、ハリウッドに車を走らせ、そこで一番大きな、そして、一番豪壯な映画館であるグローマンの支那劇場に這入る（羅府には五十の映画館がある）。劇場はすべて支那式の極彩式で、大きな寺院に這入つたやうな感じだ。観客席のチェアーも朱塗りの美しい支那式のそれだつた。

中へ這入るとエアバンクスが立ってゐる。おや、と思つて見直すと、それは等身大の似顔人形だつた。

映画を見て、外へ出ると、劇場前の廣場のコンクリートの上に、沢山の足跡が刻まれてゐる。近

寄って見ると、八丈位と思はれる可愛い足跡にスワンソンとかゲイナーとかシャラーとかのサインと一緒に刻まれてゐる。いふまでもなく此処ハリウッドの花、映画スター達の足跡とそのサインとである。

僕の足跡もハリウッドへ残しておいてやろうと、私がスワンソンの足跡の上へ靴をのせて見ると、あはれ、彼女の片跡は私の半分位しかない。

ハリウッドの夜は美しい。美しく舗装されたブルーバードストリートの両歩道を歩む。ハリウッドガールのスタイルにも、他で見られない華やかさが見られる。

合同教會へ送り届けられたのは既に十一時過ぎ、階下の高橋さんももうやすんでゐられるらしかつた。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(141)ー村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年9月号(第11巻第9号)への寄稿文です。

アメリカ巡礼(2)

羅府・ハリウッド

村島帰之

(前承)

十月五日

朝食を高橋さん處で頂いてから日本の話などをしてゐるうちに正午になった。約束によって都ホテルに平田博士を訪問、予ねて博士から一度レントゲンを撮ってやろうと言はれてゐたのである。X光線によって立体寫真をとって貰ふ。私の胸部は打診によって想像するよりは悪くはないといふ診断であつた。博士はロスアンゼルスの方が乾燥してゐて呼吸器病患者にいゝ事、胸療法が大変成績のいゝ事などを話される。

「僕ももう少し修業したら日本へ帰って賀川先生の幕下としてちつと働きますよ」と言はれる。博士は郷里岐阜県関町の教化の為に少なからぬ金を賀川先生に托せられた事は前にも書いた。

「賀川先生の身体に対してあんな働きは全く奇蹟です。医学では説明が付きません。腎臓などは特にひどいのです。私は先生にこの調子をあなたが続けて行くなら、あなたの生命は四年しか持ちません、と言ったのですよ。決してホラではないんです」と言って心配される。

私は日本へ帰って後も、先生が神の國運動のために今後も同じやうな調子の活動の続けられる事を知っているの、今の博士の言葉を文書にして貰って、日本の神の國運動本部へ送って貰ふやうに頼んだ。

三時、同じ都ホテルの一室にある大阪毎日特派員の工藤兄を訪問、夜は工藤氏に案内されてパラマウント劇場へトーキーを見に行く。紐育のロキシーにもまけない立派な小屋だ。

日本の劇場とは違って、床がビロードで張ってあるから靴の音もしない。ドアも閉切られてゐるから、トーキーは100%俳優の声を生かしてゐる。新聞の廣告に「クール」とかいてあっただけに、場内の冷却装置が完全してゐて、少しも暑さを感じない。

十時、外へ出て食事を摂って、ブラリブラリとメイン街を帰って来た。すると一流の映画館は既に果てゝゐるのに、まだ映寫の最中らしくどしどし客を呼込んでゐる所がある。見ると、それは徹夜営業の映画館で、さらに驚いた事にはアドミッションオンリー拾銭と書いてある。

徹夜で、そしてたった拾銭！ 世にこれほど安いショーがあらうか。見れば労働者らしい人がもう十一時すぎだといふのに、ドンドン入場して行く。彼等は映画を見るといふよりは、其處へ寝に行くのだ。泊るに家のない彼等は、此處に来て映画を見ながら、そして妙なるトーキーの音楽をききながら、ウトウトと眠らうといふのだ。メロディーをききながら見る夢は、天國の夢かもしれない。然し、夜明近くなって騒々しい音楽に彼の天國の夢が破れた時、表には又今日一日の労苦が彼を待っているのであらう。

失業者が沢山に出てゐる今日では、この拾銭ショウがこの界限だけでも二、三箇所もあつて客をよんでゐる。

第一番街の日本人街近く来ると、ジプシーの女の人相見の店などあつて、その前を色の小黒いメキシカンなどがゐる。何かしらギャングの物の本を見るやうな気味悪さを感じさせられながら、其處を通り抜けて合同教会に辿りつき、始めてホッとした。

十月六日

数日前から福音新報の久保田兄が交渉しておいてくれたので、ハミルトンライブラリーの入場券が手に這入った。其處で高橋さんのドライブで徳夫人等と同道してハミルトンライブラリーへ出かける。ロスアンゼルスを離れる事数哩のサンマリーの小高い丘の上だ。此のあたり一帯、数千町歩はハミルトン一家の所有である。ハミルトン氏が鉄道と石油とで儲けて、数千萬の富を有したのだ。

然し彼は後年その私有地は賣りに出したが、自分が富に任せて集めた数万巻の書籍と、價幾らとも分からない美術品とは、その豪壮な建物ぐるみロスアンゼルス市に寄附して、今は市の公共物となつてゐるのだ。建物は二棟になつてゐて、一棟は美術館、一棟は古い文献類が並べられてある。

先づ文献の方から這入って見ると、世界で最初に印刷された聖書とか、リンコルンやスティブソンの手紙等が頗る興を引いた。又美術館ではトーマス・ゲーンズボロの書いた「緑衣の子供」といふのが評判だと聞かされた。何でも時價百萬弗の名画だといふ。

コレクションの内容は兎も角として、そうした美術品を私有せずして思ひ切つて公共に委ねるアメリカのミリオナーの太腹の處が嬉しかった。

ライブラリーの裏手は一帯の廣い庭になつてゐて、その中には日本式の庭園もあつた。釣鐘堂や鳥居や、茶室やがなつかしく目に映つた。

私達は眺めのいい丘の上からロスアンゼルスを見下して、暫くを過してから又元来た道を帰つて行つた。

夜六時からは都ホテルで羅府イエスの友會幹部の送別会、平田博士、徳牧師、梶中、大坪氏等が出席、イエスの友の将来に就て語り合つた。

トーキー撮影場見學

十月七日

約束によつて毎日新聞の工藤兄と折から来合してみたミナ・トーキーの皆川さんと一緒にパラマウントのスタジオ見物に出かける。工藤兄が車を持たないので、教會の高橋さんを煩わす。

ハリウッドの大通りを少し這入つた所に、兵營を思はせるやうないかめしい門と低い塀が巡らされた一劃、それが映画フアンの涙をそそらしめるフィルムの作られる所とは。

正門の側に切符賣場のやうな小さな窓の開いた處がある。其處はエキストラの受付所ださうだ。

「エキストラは登録されてゐるのですが、その数は何千といふ多数に上つてゐます。けれど本当に使はれるのは、その中の何百人に一人といふ少数で、大部分は一年に二度位しか庸つて貰へないといふ事です」と工藤兄が説明する。

私達はエキストラではないから、正門から這入らずに、少し離れた営業部の入口から這入る。工藤兄が外國係の人に名刺を出す。待つてゐる間も、女優らしいのや監督らしいのが出這入りする。やがて私達は外國係の人に案内されて構内に這入った。兵營のやうに廣々としたグラウンドがあつて、それを取巻いて各種各様の建物が建つてゐる。或物はホテルの入口のやうな恰好であり、或物はオフィスのやうであり、或物はアパートのやうであり、又或物は貧しい普通の家のやうだ。これはその時々筋書によって適宜セットとして使はれる處のものである。そして、表側がセット用として使はれると共に、内部の部屋は普通のアパートのやうになつてゐて、俳優達の化粧部屋などに使はれるのださうだ。

「その辺の窓からガルボでも首を出しさうな気がしますね」といふと、

「いや、あいつはとても難物ですよ、何でも會社との間に取交した契約書の一項目として、本人の意志に反し、会社の宣伝の目的のため、濫りに他人に面會せしめざる事。特に新聞記者に然り、つてな事を定めてゐるとかで、僕等もまだ彼女だけには拝顔の榮を得ずにおるんです」と、工藤兄が笑ふ。すさまじい各映画会社の宣伝戦と、のぼせ上つたスターの我儘振りが窺はれる。

「今日は生憎大部分仕事を休んでゐるのでお気の毒です。サイレント時代と違って、トーキーは雑音を嫌ふので構内で屋外撮影をする時など構内のありとあらゆる音を止めるので靴音さへ遠慮しなければならぬのです」

と案内役が話す。

段々中へ行くと、とても大仕掛なセッコがまるで紙芝居の画割りやうに、色々なポーズを見せて建つてゐる「パリの屋根の下」の貧民窟に似た長屋式のアパートが、今にも倒れかゝり相に建つてゐる。私達は、そのアパートの前に立ちながら、何か一役やつてゐるやうな気持ちがあつた。

長屋と直ぐ脊中合せに豪壯なホテルの入口がつくられてゐる。貧と富とが脊中合せだ。正に社會の縮圖を見る思ひがする。

セッコの外へ出ると宙釣りの飛行機を高いはしごに乗つたカメラマンが撮影してゐる。これで空中大活劇でも作られるのだらう。更に行くと五十坪ほどの池が掘られてゐる。

「これが大西洋になつたり太平洋になつたりするんです。五十坪の大洋で大海戦も行はれるし、巨船の大衝突も撮されるのです。」

正に幻滅である。さう言へば、池の傍におもちやのやうなトリックの鉄橋がめぢやめぢやに壊さ

れて捨てられてある。恐らくは汽車の大衝突か、鉄橋破壊の場面が撮られたに違ひない。

私達はトーキーを撮ってゐる場面が見度かった

(あと多分一頁分はあると思われるが、手元の号はそれが欠けている)

ついで巻末の広告の賀川の絵画をスキャンして置く。

